



大阪インターナショナルチャーチ ジョセフ・トッティス牧師

2013年2月10日

タイトル: 「1, 2, 3...この人に違いない！」

聖書箇所: 創世記2:18-23

創世記 2:18 神である【主】は仰せられた。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」

先週の学びを振り返ってみましょう。前後の内容から、この箇所はアダムについて語っていることがわかります。そして、独身していると社会的に負い目を感じることもあっても、聖書はそう教えていないことが、先週の学びでわかりました。

神に言わせれば、結婚していないことは恥でもなんでもありません。

また、結婚していないことは神からの呪いではありません。

むしろ、できるなら賜物として受け入れるべきものです。

けれども一方で、神がアダムをご覧になったように、天からあなたをご覧になっているかもしれません。神は、私のこともご覧になって、こうおっしゃいました。「ジョセフが、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」

そうして、神はエイミーを私のためにと考えてくださり、神の完全なタイミングで、エイミーを祝福として与えてくださいました。この創世記のなりゆきに注目してください。これは私たちが学ぶべき模範です。これが唯一のかたちとは言いませんが、クリスチャンとして過ごした私の独身時代にとっても役立つ模範です。そして、今独身でいらっしゃる方々にもぜひ役立てていただきたい模範です。

神は、アダムがひとりであるのはよくない、彼にふさわしい助け手を造ろうとおっしゃいましたが、その後どうなさったでしょう。

創世記 2:19 神である【主】は土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造り、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が生き物につける名はみな、それがその名となった。

創世記 2:20 人はすべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた。しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった。

ここで一旦考えましょう。何が起こったでしょう。神はアダムにふさわしい助け手を造るとおっしゃいました。なのに、まずなされたのは、あらゆる動物を造ってアダムのところに連れてこられたことでした。なぜでしょう。

神は何をしておられたのでしょうか。なぜすぐにエバをお造りにならなかったのでしょうか。エバがいれば、アダムが動物に名をつけるのを手伝ってくれたかもしれません。なぜまず動物を造られたのでしょうか。

それは、第一に、アダムが自分のニーズに気づく前に、神はアダムの必要を知っておられたからです。アダムは園にひとりでしたが、さびしいとは思いませんでした。自分が独身であることも知らなかったのですから。

それで、次に、神は、アダムが自分のニーズに気づけるようになさいました。あらゆる動物に名をつける役割を与え、動物が雄雌の対でやってきたのです。

そういうわけで、

20b 「しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった。」

今ここにいる独身の方はこう思っているでしょうか。

神さま、わかっています。自分のニーズに気付かされました。だから、もう動物を連れて来てくださらなくてけっこうです。既婚者もたくさん知っているし、恋愛映画もたくさん観ました。自分が独身であることはよくわかっています。だから私は準備万端です。

ではお聞きします。

配偶者が必要だというあなたの思いは、本当に神が気づかせてくださったものですか。

それとも、この世にそう思わせられているのでしょうか。

1ヨハネ 2:16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。

私たちは、神からのものとこの世のものとを注意深く見分ける必要があります。

神が私のために誰かを備えてくださっている予感が心にある、と言う人もいるかもしれませんが、そうでしょうか。気をつけてください。私たちの心について聖書は何と言っていますか。

エレミヤ 17:9 人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。

では、どうすればそれが神によるものだとわかるのでしょうか。神が私たちのために造ってくださった特別な人のために、私たちの心が備えられつつあるとどうやって確信するのでしょうか。

先ほどの個所で、神がアダムを備えてくださったのと同じ方法かもしれません。

創世記 2:21 神である【主】は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。

創世記 2:22 神である【主】は、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。

#1 アダムが自分のニーズに気づくずっと前から、神はアダムのニーズを知っておられました。

#2 アダムにニーズを気づかせたのは、まぎれもなく神です。神がアダムのもとに雄雌一対のあらゆる動物を連れてこられたことによってです。

#3 ここで、神がアダムに妻を連れて来られる前に、アダムは眠りにつく必要がありました。それも、うたた寝ではありません。深い眠りです。まったく無意識の状態です。妻が必要だというニーズについても無意識になります。

独身の皆さん、結婚したいという思いを一旦そっとしておく気はありますか。

では、眠りにつき、独身でいることについての思いをそっとしておくとはどういうことでしょうか。

赤ちゃんが疲れて泣いているのを見たことがありますか。疲れているのに、どうしておとなしく寝られないのでしょうか。疲れてへとへとになっているのに、泣きわめいて、力尽きて寝てしまうまでいつまでもぐずぐず言いつづけます。

クリスチャンの独身の人たちも、なかなかおとなしく寝ようとしなない人が多いです。もしアダムが寝ようとしなかったらどうなったでしょう。嫁探しの手伝いをすると言って、アダムが妻を自分で見つけようと周りをきょろきょろしたらどうでしょう。オランウータンやチンパンジーのようなサルを見つけたのでしょうか。残念ながら、そういうことは珍しくありません。おとなしく寝ようせず、婿探し・嫁探しを神に任せないのです。その結果、愛の意味を履き違えて、どうしようもない獣をつかんでしまいます。実際、心が痛むようなひどい話がたくさんあります。そういう話を聞くと本当に悲しいですし、だからこそ、きままな願いを持つ人には聞きたくないメッセージであっても、こうやって話さなければと思うのです。

気ままな願いとはどういうことでしょうか。
こういうことです。

2テモテ 4:3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、

自分の人生は自分で決めると強く思っている人が世間にはたくさんいます。また、その意見に賛同する人もたくさんいることはわかっています。

例えば、結婚相手と出会う方法とグーグルで検索すると、199万件出てきます。

ですから、気ままな願いをもって捜しつづければ、自分に都合のよい意見にいつかは出会うでしょう。

もしそうでなくても、199万1件目の意見になるだけのことです。

しかし、ついに泣き疲れ、相手探しに疲れ、サルとの付き合いにも疲れたクリスチャンが私の周りにたくさんいます。その人たちは、先ほどの赤ちゃんの話のように、ぐずぐず言うのにも疲れて、寝て忘れようとした人たちです。

どういうことかと言うと、自分でどうしようもないことをくよくよ考えるのをやめるということです。
「手放して、神にさせていただく」ことを選んだのです。

その人たちの多くは、自分の人生を満喫し、独身の賜物とそれに伴う祝福を享受しました。そして、そういうクリスチャンの多くは、深い眠りからついに起こされて、配偶者と与えられています。

詩篇 84:12 万軍の【主】よ。なんと幸いなことでしょうか。あなたに信頼するその人は。

エレミヤ 17:7 【主】に信頼し、【主】を頼みとする者に祝福があるように。

そして、多くのクリスチャンが「天が決めた相手との出会い」の証を語ってくれます。私自身や妻のエイミーももちろんですが、OICで翻訳をしている有澤優子さんもそうです。もし私の言うことが信じられないなら、エイミーや優子さんに聞いてみてください。

アダムとエバにも聞いてみたいところですが、それは今はできません。けれども、聞く必要はありません。天が決めたアダムとエバの出会いについての証はすでに、聖書に記してあるからです。

アダムが眠りから目覚めてエバを初めて見たとき、どうなったでしょう。

創世記 2:23 人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」

一目ぼれとはまさにこのことです。アダムはスターバックスでエバと何回かデートしてから自分に合うとわかったのではありません。

それはとてもシンプルでした。彼はエバを見た瞬間に彼女が自分の相手だとわかったのです。

それでこのような言葉が出ました。

「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。」

これはヘブル語のイディオムで「あなたは私の片われそのものだ」という意味です。

言いかえれば、アダムにとってエバはただの「運命の人」ではありません。「体も心もたましいも赤い糸で結ばれた相手」なのです。

どういうことでしょうか。

神は3つで1つのお方です。父なる神、子なる神、そして聖霊なる神です。私たちはこれを三位一体と呼びます。そして、神は人間をご自身に似せて造られました。

創世記 1:26a 神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。」

非常に興味深いのは、神と訳されたヘブル語は「エロヒム」であることです。これは「神々」を意味します。ヘブル語で神の単数形は「エル」です。もしヘブル語で書いた著者が「エロヒム」ではなく「エル」と書いていたなら、「ひとりの神」が「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。」とおっしゃったこととなります。しかし、神々を意味する「エロヒム」が「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。」と言われたので、私たちの神が三位一体の神であることを差しています。では、神が三位一体であることはどのようにしてわかるのでしょうか。

ヘブル語には、英語にも日本語にもない二数形といわれるものがあります。神の二数形は「エラ」です。これはふたつの神を意味します。もし、この個所で「エロヒム」でなく「エラ」が使われていたなら、神に2つの格、つまり父と子、があるという強い論拠となります。しかし、ここで使われたのは複数形の「エロヒム」です。「エロヒム」は3つ、またはそれ以上を差します。そして、聖書は神に3つの格があることを明らかに語ります。父、子、そして聖霊です。

3つでひとつの神が、3つでひとつの人類をお造りになったわけです。



体、たましい、霊です。

これは、新約聖書のあちこちに書かれています。例えば、

1テサロニケ 5:23 平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだ
が完全に守られますように。

聖書には、霊とたましいが置き換え可能なかたちで使われている箇所もありますが、そのふたつには見過ごすことのできないはっきりした違いがあります。私たちは神のかたちに似せてつくられた霊の存在です。私たちのたましいには、思い、意志、感情が含まれています。私たちの体は、この世で生きる間の住まいです。人類はこの事実においてほかに類を見ない存在です。人間と動物の境界は、霊があるかどうかと言えます。例えば、犬には体とたましいがあるので、頭で考えたり、感情を持ったりすることができます。しかし、犬が食べ物を食べる前に神に感謝する姿は見たことがありません。

改めて言いますが、人類はこの部分においてほかに類を見ない存在です。

私たちの霊は、神に関わる手段です。これからも永遠にそうです。

アダムの場合、霊、たましい、体は3つとも健全に機能していました。神を信じて交わることによって呼び覚まされた霊が、アダムのたましいと体を誘導する働きをしていました。しかしそれは、アダムが罪を犯すまでのことです。アダムが罪を犯したとき、あることが起こりました。彼は、今まで真実として信じていたことを捨て、偽りを選んだのです。そうして、順番が逆転してしまいました。アダムのたましい（思い、感情、意志）は、体にリードされるようになったのです。これが、人類すべてに受け継がれるアダムの罪の呪いです。

私たちは生まれた時から体の欲に支配されます。そして、霊の抑圧された状態は、この世で神を信じないまま生きる限り続きます。

ローマ 1:25 それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。

これはもちろん、神と和解するまでの人の状態です。神と和解すれば、新しい命へとよみがえらせられ、あるべき立場へと置かれます。これはいつ起こるのでしょうか。私たちがイエス・キリストを主であり救い主として信じて受け入れる瞬間に起こります。そのとき、私たちの霊は呼び覚まされ、私たちは生まれ変わって、神と生きる者とされます。肉に支配されるのではなく、内住の神の聖霊とひとつにされ力を得た私たちの霊がリードする人生です。使徒パウロは、肉の支配と霊の支配の対比をローマ 8:5-6でこのように語ります。

ローマ 8:5 肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。

ローマ 8:6 肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。

なぜこのような話をするのでしょうか。それは、あなたがアダムのように御霊に導かれて生きるクリスチャンなら、「候補」に挙がった人が本当に神からかどうか分かるはずだからです。

というのも、自分自身のアイデンティティーや構成要素を理解することが、肉の思いではなく御霊にかなった基準を設定するのに役立つからです。

あなたの基準は何ですか。将来の配偶者に何を求めますか。

ずっと仲良くできて何でも話せる「たましいでつながる相手」を探すべきでしょうか。

肉体の魅力がある「体でつながる相手」を探すべきでしょうか。

いっしょに祈り、礼拝し、主に仕えられる「霊でつながる相手」を探すべきでしょうか。

アダムの言葉を思い出してください。

創世記 2:23。。。 「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。。。 」

どういうことでしょうか。

「1,2,3・・・この人に違いない！」

「体、たましい、霊！あなたこそ私の片われそのものだ」

神の最善をいただきたいですか。それなら基準を高く設定してください。妥協してはいけません。それぞれの基準についてもう少し詳しく見ていきましょう。まず

体：外見の魅力も結婚生活には重要な部分です。配偶者に外見的な魅力を感じていないと、好みの外見の人と出会ったときに誘惑を受けて道を踏み外すかもしれないからです。結婚相手の候補者とする人に対して、外見的にも魅力を感じるべきです。恋愛感情です。目、笑顔、髪の毛、またはおへそでも何でも、その人の何かに惹かれるはずで

雅歌 7:2 あなたのほそは、混ぜ合わせたぶどう酒の尽きることのない丸い杯。あなたの腹は、ゆりの花で囲まれた小麦の山。

ここで言いたいのは、何らかの外見的魅力があるということです。そうすれば、年老いて、しわや脂肪、障害やはげなど、何があっても、心を奪われたころのすてきな姿を相手の中に一生見ることができるでしょう。

次に

たましい：これは私たちの思いと感情を司る部分です。結婚を考える相手とは、ちゃんとコミュニケーションを取れなければなりません。また共通点があり、他愛のないことから大切なことまで何でも話しやすい相手です。その人といっしょにいるのが楽しくて、性格が合う人です。あなたの考え方や気持ちを理解してくれる人でなければなりません。これは、結婚生活においてとても大切なことです。

1ペテロ 3:7a 同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、

将来の配偶者を見つける3つ目の基準は

霊：霊の一致はあるでしょうか。自分を理解してくれる人を基準に入れているなら、その人は、あなたと信仰も分かち合える人でしょう。そういうわけで、世界中のたいていの宗教は、信者が同じ宗教の人と結婚するよう勧めるのです。なぜなら、

「信仰があなたにとって大切なら、信仰を分かち合えない人はあなたをちゃんと理解できないからです。」

クリスチャンとして、ふたりの主への愛と献身、そして、主との関わりは同等レベルでしょうか。

多くの人は妥協して、神の最善を受け取ることができません。3つのうち1つか2つが合えばいいか、とか、まったく合ってなくてもという悲しいケースもあります。結婚願望が強すぎて、結婚してくれるなら誰でもよく思ってしまうのです。

3というのは聖書で一致と安定を象徴する数字です。わかりやすい例を挙げると、いすを考えてみてください。安定したいすには少なくとも3本の足が必要です。

3分の1ではバランスが悪く、ぐらぐらします。3分の2は大丈夫かもしれませんが、ずいぶん努力が必要です。クリスチャンにとって、体、たましい、霊の3つが揃って初めて、全人的な安定が得られるのです。

これは極端な話だと思えるかもしれませんが、私には役立ちました。

もちろん3分の1や3分の2で妥協することもできましたが、私は眠りにつくことを決意し、神の最善以外のものには絶対に起こされないと決心しました。

独身の皆さん、あなたの基準は何ですか。基準をちゃんと持っていますか。

私に役立ったように、皆さんにも今日の学びが役立つように祈ります。

最後に、ペリピ 4:6-7にある使徒パウロの励ましの言葉を読みましょう。

ペリピ 4:6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

ペリピ 4:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

祈りましょう。